

【基盤研究(S)】 大区分A



研究課題名 木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた 参加誘発型研究スキーム確立による知の展開

国立文化財機構・奈良文化財研究所・ ばば はじめ
都城発掘調査部・史料研究室長 馬場 基

研究課題番号： 18H05221 研究者番号： 70332195

キーワード： 木簡、オープンデータ化、文字文化、日本史

【研究の背景・目的】

木簡は、可能性に満ちた資料である。遺跡から出土する「ナマ」の資料であり、歴史学・国語学・国文学等、多様な分野で重要な役割を果たしている。一方、木簡は極めて脆弱で公開が困難である。そこで、高品質な研究資源化が強く希求されている。

奈良文化財研究所は、日本の木簡研究のナショナルセンターであり、こうした要求に応える有力な手段の一つとして、木簡関連のデータベース群を開発、web公開し多くの利用（2016年度のアクセス数は全体では60万件超）を得てきた。

近年、木簡を巡る研究は、木簡の記載内容に関する個別的研究から、木簡の形状・素材、字形、関連情報も含めた総合的な研究へと大きく展開している。

データベースは、研究状況の変化に柔軟に対応できない。データベースを作成した機関毎の違いも大きく、相互連携にも困難が伴う。そこで、多くの研究者の多様な視点や成果を盛り込んで、研究資源の「量の増大」「質の多様化」を加速するには、従来の「様々な提供者」が、「一方的に提供」するデータベースを越えた手法・考え方が求められている。

こうした研究状況から、本研究の最大の目的は、「一方向的な研究資源提供」から「双方向的な研究資源共有」へのパラダイムシフトの惹起である。すなわち、研究資源のオープンデータ化による参加誘発型スキームの確立によって、木簡に関する様々な知を、個別の研究機関・研究者から解放して広く共有する体制を作る。この開かれた知の共有によって、研究を大きく展開し、東アジアや世界での木簡・文字資料の研究、特に歴史的文字の研究をリードすることを目指している。

【研究の方法】

世界的に広まりつつある「IIIF」(トリプル・アイ・エフ)という資源化ルールを導入しつつ、具体的には、以下のA)～C)によって、目的の達成を期する。

- A) 木簡研究資源の「量の拡大」
 - a 歴史的な文字研究資源化用の取り決め策定
 - b 奈文研所有の既存研究資源のIIIF化
 - c IIIF化による国内外機関の連携体制の構築
- B) 木簡研究資源の「質の多様化」
 - a 参加誘発型スキーム確立に向けたツール開発
 - b 資源化過程の情報化による経験知の資源化
 - c 歴史的な文字に関する注釈データの充実
- C) 文字資料研究を牽引する新研究の展開
 - a ビッグデータ解析手法等による検討
 - b 分野・国を超越した研究の惹起と深化・公表

【期待される成果と意義】

木簡のデータとしては、国内最大規模を誇る奈文研のデータをIIIF化することで、日本国内はもとより、世界レベルで、機関や国境を越えての歴史的な文字の研究資源化に関する連携と協業が実現する。

また、出土から研究資源化までの様々な作業への情報技術導入による経験知の直接的な研究資源化や、SNS等で発信される「知」の集積によって、これまで失われていた多くの経験知・既存知の蓄積が飛躍的に進み、研究資源化されることが期待される。

この新たに研究資源化した経験知や気づきを解析することは、多様な視点からの成果が期待される。本研究では、主として日本での文字文化成立期における文字筆記技術の具体的様相の解明を目指す。

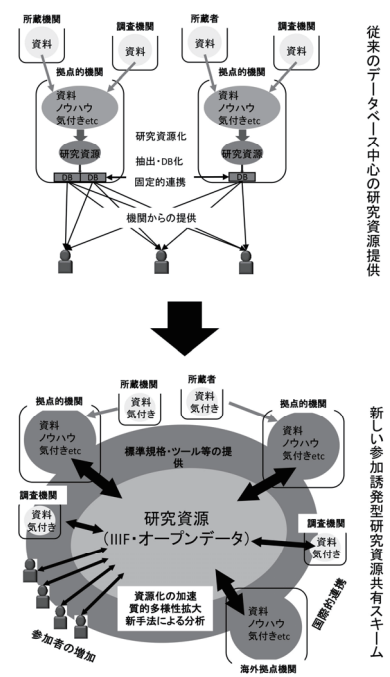


図1 本研究による新スキーム

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・馬場基『日本古代木簡論』吉川弘文館、2018年
- ・石塚晴通監修／高田智和・馬場基・横山詔一編『漢字字体史研究 二・字体と漢字情報』勉誠出版、2016年

【研究期間と研究経費】

平成30年度～34年度
96,100千円

【ホームページ等】

- <http://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/>
- <http://mokkanko.nabunken.go.jp/en/>
- <http://mokkanko.nabunken.go.jp/cnk/>
- <http://mokkanko.nabunken.go.jp/cnh/>
- <http://mokkanko.nabunken.go.jp/kr/>